

# 史苑

第十七卷第二号（通巻第七十五号） 昭和三十一年一月

## 明治迫害期における切支丹社会の考察

——五島青方天主堂御水帳による——

海老澤 有道

基督教史学会々報第二四号（昭和三〇年七月）に平戸の御水帳（洗礼台帳）を紹介し、そうしたものがなお九州の古い教会に多く保存されているはずであり、それらの研究発表を期待する旨述べたところ、潜伏切支丹の研究で著名な南山大学田北耕也教授は御渡米前の御多忙の中をわざわざ御所蔵になる長崎県南松浦郡中通島の青方村天主堂から得られた御水帳を届けて下され、乏しい看見を補つて下されたばかりか、私にその研究を囑された。この御好意に感佩するとともに、従来こうしたものに宗教史的にも宗教社会学的にも研究が加えられていず、史料としての価値も未分知られていないので、ここに紹介を試み、田北教授の御好意に応えたいと思う。

### I 解題

明治初期のカトリック教会の洗礼台帳は潜伏時代以来の洗礼を御水と云つた伝統に従つて御水帳と呼ばれる。これら御水帳は潜伏・復活時代から明治初期の迫害時代における貴重な史料であり、特に肥前各地のそれらを総合的に研

明治迫害期における切支丹社会の考察

究することによつて、復活當時の教勢を正確に知ることが出来、復活教会史上の人物を確認出来るばかりでなく、その人的構成や受洗（回心）年令などが明らかにになり、さらに信者の移動、婚姻特に教外者との婚姻関係、その他の家族関係なども知ることが出来る。家門改帳の現存するものは多いが、それらは系図的に親子、夫婦関係を計らず、出生地も記されていないのに対し、御水帳は本人の祖父母まで記載され、年長者の場合は五代にわたる系譜が判り、従つて、彼らの姻戚関係を明らかにすることが出来る。また出身地・出生地・受洗地の記載は、子供らの年令・出生地と合せて信者の移動状況を知ることが出来る。まさに江戸時代から明治初期を通じて庶民資料として最も詳しいものであり、潜伏から復活へのキリシタン史料として、また肥前における半農半漁村社会の基礎的資料であり、同地方特に五島民俗調査の基礎的条件であるカトリックに関する知見を加えるものとして民俗学的にも重要な資料と云える。

本稿は青方天主堂（現在の鯛ノ浦教会）の一冊の御水帳の紹介にすぎず、それらを全面的に明確にすることは出来ないが、この紹介によつて各地教会御水帳の利用が可能となる日を期待しつつ、考察を加えたいと思う。

この御水帳はさきに紹介した平戸の僅か一葉とは異なり、二九二名を記載した三百名分一冊（百名分一綴を合綴したもので、百、二百の間に白紙二枚を挿んでいる）。一八七七（明治十）年九月十一―十五日の間に記録されたもので、内容についての考察は後廻しにして、まず書誌的解説をして置こう。

縦三五・三樞、横一五・二樞。青色表紙の縦長の和装。一八七三年までのプティジャン版と同質の唐紙。右版刷で和紙活字版の平戸御水帳より古版であることを示している。青方のと同様のもので従来知られているものに昭和四年大阪朝日新聞社が催した開国文化展覧会に出陳された長崎港外伊王島の大明寺御水帳がある。何れも「一千八百七十二年」と年号に余白があり、一八七〇年代に使用するため作製されたものであることは言を俟たない。前記の如く青

實父の名	所	實父の名	所	實父の名	所
實の婚對の人	此の兩人入る	實母の名	所	實母の名	所
實母の名	處	子二御水又仕方 <small>（女）</small> の父の名	所	子二御水又仕方 <small>（男）</small> の父の名	所
		子二御水又仕方 <small>（女）</small> の名	所	子二御水又仕方 <small>（男）</small> の名	所
		地方の名	所	地方の名	所
兒の名	子二名	兒の名	子二名	兒の名	子二名
		所	所	所	所
		日	日	日	日
		平	平	平	平

第2図 平戸御水帳

[illegible]

第1図 青方衝水帳

方御水帳は一八七七年九月、大明寺のは一八七六年三月の記載であるから一応一八七五・六年ごろの印刷と推定されるが、唐紙・石版刷はブティジャン版の秘密出版時代の特徵であり、御水帳もまたその頃まで即ち一八七二年以前にまで溯り得るのではないかと考へる。（諸教会の御水帳の利用が許されるならば、そのしたことはより明らかになるであらう。）

印面は青方・大明寺御水帳と平戸のそれとは異同がある。特に「靈魂の名」（靈名）

(111)

と「肉身の名」(俗名)との記入は当然の事ながら、後者では明らかに区別されていないこと。しかも「はつこむに

よ」(初聖体拝領)「こんひるまさん」(堅振)とキリシタン伝統を示す語が後者に見えるのに、より早い前者にはないこと。また同じく「子に御水又仕方を授けた神父の名」の欄が前者にはないことなどが注目される。その他の異同は写真を参照せられたい。

註(1) 拙稿「キリシタン典籍研究余録」(聖心女子大学論叢三) 参照。

(2) 久保 清・橋浦泰雄氏共著「五島民俗図誌」にもこれについては明らかにしていない。

## II 中通島復活切支丹略史

五島ではキリシタン時代に領主宇久氏・久賀氏<sup>ひさかた</sup>らが人信し、教勢栄えたが、江戸時代の迫害に次第に殉教あるいは四散、ごく僅少の者が十八世紀中葉頃まで潜伏していたが、それも殆んど死に絶えてしまった。従つて五島における潜伏切支丹・復活切支丹の歴史は寛政九(一七九七)年、大村領の黒崎、三重村民一〇八名がまず移住したのを始め、同藩外海地区から約一千名が移住したのに始まる。<sup>(1)</sup>それは五島藩が大村藩に要請したからとの事であるが、彼ら移住者の殆んどすべては五島の宗門改めが緩いことを伝え知つて進んで移住した潜伏切支丹であつた。彼らは久賀島、福江島などに部落を作り、居食者<sup>いじきもの</sup>と呼ばれ、五島領民からは邪魔者扱いされつつ、瘦地を開墾、他領の入百姓の如き保護を受けることもなく貧しい困難な生活を続けていたが、次第に人口も増加、中通島に進出、大村藩からもなお引続いて移住して来る者もあつた。それとともに五島藩では宗門改めの励行に努めたが、周囲一里足らずの小島でそれまで無人島であつた頭ヶ島<sup>かぶら</sup>にも安政六(一八五九)年有川の代官の許可を得て二・三戸が移住して以来、同島が小頭役を除きみな潜伏切支丹なので、自由の天地を求めて五島各地から再移住する者が次第に多きを加えた。彼ら無学な農民ながら信仰の自由を求めて移住したことは日本思想史上、まことに注目すべきことと云わねばならぬ。

一八六五年二月長崎大浦に天主堂が建立され、やがて浦上の潜伏切支丹らが天主堂見物と称してプティジャン Bernard T. Petitjean に信仰を表明、いわゆる切支丹の復活を見たことは、すでに周知のことである。<sup>(2)</sup>その五月、桐ノ浦の一青年ガスパルと作がたまたま長崎に至り、天主堂を訪ね信仰を表明、プティジャンに対し、自分の島には千人以上の切支丹が隠れている旨を告げ、喜び勇んで帰島した。<sup>(3)</sup>彼らが先祖代々待ちこがれたパアレ再来のニュースはたちまち五島各地の帳方、水方らに伝えられ、彼らは大浦を訪れ、連絡を取るようになり、プティジャンは彼らの洗礼祈禱文の転訛を正し、その他オラシヨ(祈禱)文を与えて帰島せしめた。<sup>(4)</sup>ここに五島潜伏切支丹の信仰は燃上り、もはや従来の如く偽瞞的潜伏状態を続けることは出来なかつた。十二月中旬、五島切支丹の代表十二名は長崎に赴き教理上の指導を受けるとともに鯛ノ浦のドミンゴ松次郎の書簡をもたらし、隠家の用意があるからと宣教師の米島を求めた。<sup>(5)</sup>松次郎も黒崎村出津からの移住民の出身で、五島切支丹きつての知識人であり、その信仰とともに信者の代表者、頭目とも仰がれていた人である。が、当時全二・三才の若年。如何に人望を集めていたかが知られよう。彼についてはその甥森与重氏による小伝があり、私はそれに註解を加えて紹介したことがあるのでここには省略するが、のちプティジャン司教を援けて復活教会に大きな貢献をなした人物である。<sup>(6)</sup>

翌一八六六年二月、松次郎は自ら大浦天主堂に至り三日間滞在、三月以来書簡や信者総代の来往盛んになるうち、五月にはフェレー Furet クーザン A. Cousin の宣教師が新たに長崎に渡来した。プティジャンはそこでかねての松次郎との約束通り、七月ごろには宣教師を五島に送る計画を立てたが諸事情のため果さぬうち、十月には松次郎が再び大浦天主堂に至り、いわば再教育を受け、また宣教師の来島をうながした。<sup>(7)</sup>

祭壇を設け、信者に秘蹟を受けた。クーザンの日記によると二月十日ドミンゴ（主日）のミサに八〇名、十七日にはもつと多くのものが集まつたという。その時松次郎は頭ヶ島は全島切支丹なので隠れ場所として雇賃であり、バアデレを隠まうに都合が良いから自分も近く引越したいと思う旨、語つたという。<sup>(8)</sup>

間もなく松次郎はその言の通り頭ヶ島に移つたが、彼の居宅は聖堂兼伝道士養成所の如くになった。即ち五島各地から有為な青年が選ばれて彼の許に來り、教理教育を受けた者がまた各地に出かけて布教に當つたのである。一方、浦上信徒も信仰に燃えて三月には五島に渡り伝道を試み、ガスパル与作を助け、クーザンもまた四月のパスカ（復活祭）に頭ヶ島に渡り一週間滞留するなど、<sup>(9)</sup>長崎五島間の連絡は密を加え、両地方の信仰はますます燃上つて行つた。しかし、その結果、当然にもまず七月浦上に迫害の火の手が上り、両者の連絡も途絶えがちになつたばかりか、翌一八六八年九月になつて久賀島に始まつた迫害は、たちまち中通島、頭ヶ島にも及んだ。

十一月頭ヶ島の信者らは松次郎を曾根に落した上で、すべて捕えられ、有川で三カ月間も算木賣などの拷問を受けた。やがて表面上改心して帰島を許されたが、役人の安心する間に次々に逃亡、頭ヶ島は無人島の如くなつたと浦川師の著書に録されている。<sup>(11)</sup>

これを史料に即して見ると同島の切支丹は一八六七年までは一八戸一三〇乃至一三五名であつたが、クーザンの渡つたころは二五戸になつていた。<sup>(12)</sup> 県立長崎図書館所蔵福江藩（五島藩改称）の記録、明治二（一八六九）年「切支丹信仰之者惣人数付」によると、この時全五島（但し平戸領の中通島北部を除く）で二六三戸一〇〇名が捕えられ、三三五名が改心。残余は家牢、所預けあるいは出奔、三〇名が病死している。そのうち頭ヶ島では二五戸一四四名、四八名が所預け、五六名が出奔。その所預けの四八名のうち四〇名は、同年八月付の「頭島居住改宗人数血判帳」で

見ると血判改心している。しかし辛未（一八七一）五月付の「異宗徒人口戸数并死生出奔調目録」によると、頭ヶ島居住異宗徒は僅か一戸四名となり、一八戸六四名（当然血判改心者も含む）は「右之者明治二（一八六九）年夏ヨリ当辛未春マテ追々出奔行衛相分不申候」とあるように全員出奔してしまつたのである。即ち浦川師が漠然と記されたために無人島となつたのが明治二年中の如く思われ易いが、事實は二年から四年春にかけて出奔したものであつた。

曾根でもクーザン来島以来、信仰がとみに燃上り、四〇戸ほど全部が信仰を公けにし、善七という青年を選んで松次郎の許に派して教理を研究せしめた。間もなく頭ヶ島の迫害に際し曾根に落ちのびた彼を隠まつたが、松次郎迫害の手が及ぶと彼らは青砂ヶ浦、冷水、江袋、若松島へと、転々と隠家を与えて隠し了え、遂に長崎に避難させた。それだけに曾根地区の迫害は激しく行われたのであつた。<sup>(13)</sup> その他の中通島各地も、同様迫害の嵐に見舞われたのであるが、冗長を嫌い、ここには省略する。

ここに取扱う青方天主堂御水帳記載の人々は、頭ヶ浦、曾根、鯛ノ浦などのこうした迫害の中に、あらゆる苦難に堪え信仰を守り、ようやく一八七三・四年になつてもとの住居に戻り、生計を営むことが出来るようになった人々であり、教会生活を営むようになって三年後、ようやく安定したこの記録が、この御水帳なのである。

註（1）（浦川和三郎師著「五島キリシタン史」一八七八頁。同「切支丹の復活篇」三一―三二頁。なおキリシタン時代には「はかめ」と呼んだ。）

（2）F. Marnas, La Religion de Jésus, Ressuscitée au Japon, t. I, Paris 1869, pp. 487.

（3）Ibid. pp. 508―509.

（4）Ibid. pp. 532―533, n. 1

（5）Ibid. pp. 539―540.

（6）拙稿「ヤミシゴ森松次郎小伝」（日本カトリック新聞、昭和十八年十月十日―十一月十四日連載）

明治迫害期における切支丹社会の考察

## 明治迫書期における切支丹社会の考察

- (7) Marnas, op. cit., pp. 563—564.  
 (8) Ibid. pp. 591—595.  
 (9) Ibid. p. 601.  
 (10) Ibid. pp. 618—620.  
 (11) 浦川師「五島キリシタン史」一七五—一七六頁。同「切支丹の復活後篇」二〇四—二〇七頁。  
 (12) Marnas, op. cit., p. 618. 浦川師「復活前篇」四二—四四頁。前掲松次郎小伝では慶応三(一八六七)年に百三十五名とある。  
 (13) 浦川師「五島キリシタン史」一九五—二〇七頁。「復活後篇」二二三—二五四頁。

## III 居住地と出生地

さてこの青方御水帳は二九二名の本人につき、その父母及びその各々の親、即ち本人の祖父母まで三六九名の記載がある他、本人以外の水方など二六名の名も記入されており、重複者を除き総計六八七名のキリシタンの名が知られる。一八七七年現在七〇才の本人の場合には、その出生は一八〇七(文化四)年、その父母の出生は十八世紀にまで遡るわけで、寛政の外海からの最初の移住者を含むものであり、彼らの出生地の記載によつて、その移動状況をほぼ推知することが出来る。

まず本人二九二名の居住地は「御水帳」とあるハシ下部に記入されている。この御水帳は後日にあらためて記されたものであるだけに、部落ごとに、また家族ごとにまとめて書かれているので、記載のない者も一七名あるが、前後の関係、家族の居住地によつて推定するに難くない。それら推定をも含めてこの御水帳記載者の分布状況は第1表Aの如くである。

〔第1表 A〕 御水帳信者居住地別表

地名	世帯			性別		計
	戸数	個人	計	男	女	
鯛ノ浦	19	3	22	52	60	112
頭ヶ島	14	3	17	37	35	72
蛤	7	0	7	21	17	38
小浦	4	1	5	9	13	22
堀切	4	1	5	10	13	23
子水	4	0	4	11	9	20
明	1	0	1	2	2	4
不	0	1	1	1	0	1
計	53	9	62	143	149	292

〔第1表 B〕 調書信者居住地別表

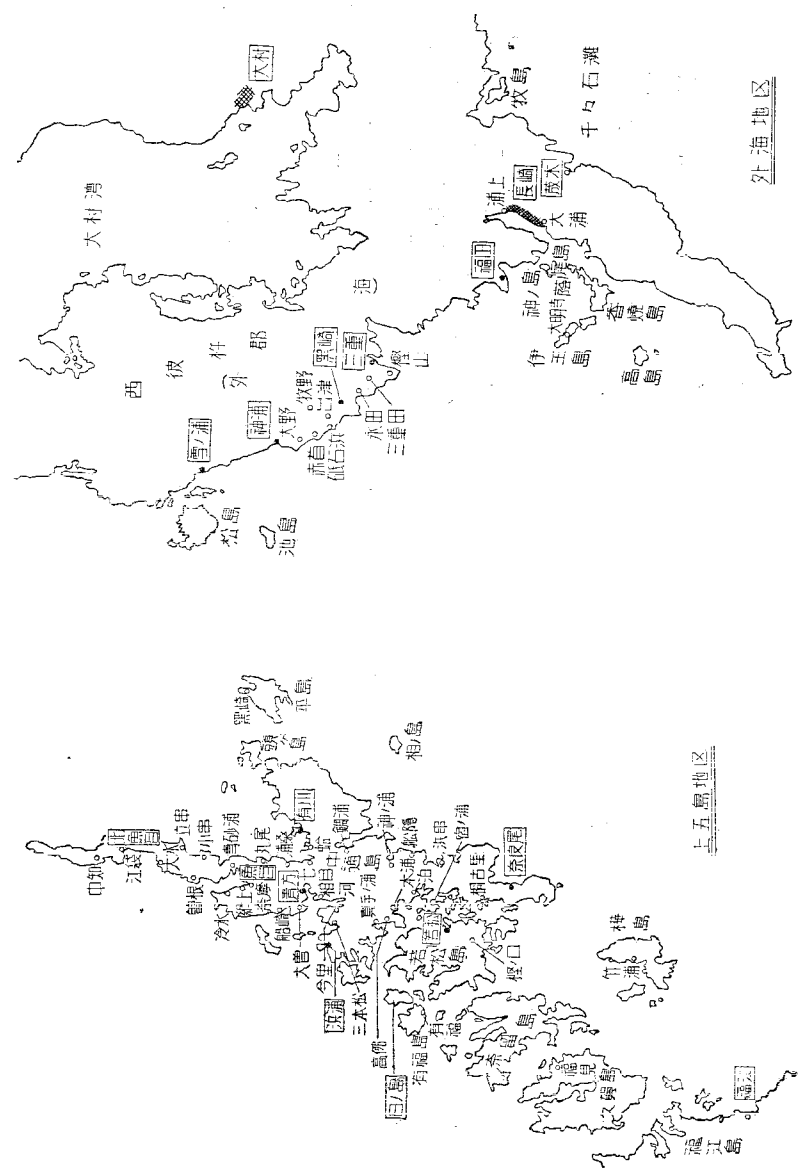
地名	世帯	性別		計
		男	女	
方	12	39	27	66
崎	5	8	5	13
根	35	70	55	125
袋	14	41	27	68
上	7	17	14	31
内	1	1	1	2
串	12	29	28	57
桑	5	9	15	24
計	91	214	172	386
A + B	144	357	321	678

即ち鯛ノ浦、頭ヶ浦が最も多いが、青方聖堂区に属する魚目、青方、有川三ヶ村のうち有川村の七部落のみであり、また当然あるべき人物も洩れており、これをもつて当時の青方教会所属信者全部と見ることは出来ない(従つてこの御水帳は現在の鯛ノ浦教会の御水帳と称した方が、むしろ妥当である)。恐らくこの御水帳の他に百名単位で記載したものが少くとも幾冊かは他にあるのであろう。

(117)

長崎県立図書館所蔵の壬申(一八七二)六月付、魚目村、青方村の「邪宗信仰之者調書」(以下単に調書)記載者は、当然この青方教会を構成する人々であろうが、御水帳と調書の記載部落は全く異なり、従つて人物も共通するものがない。この調書記載部落を含む御水帳が当然他にも存在するはずと思われる。従つてこの両者を合せたものが、ほぼ明治初期の青方教会の実情を伝えるであろう。尤も両者間に五年のへだたりがあり、統計的には到底正確は期し得ないが、参考のために次に表示して置く。(第1表B)。従つて他の御水帳の出現を待たねば決定的なことは云えぬ。

明治迫害期における切支丹社会の考察



わけがあるが、調書と合せ、あるいはその他の記録類と対照しつつ、この御水帳一冊の利用によつても、なお以下述べ  
るように相当多くの事情を知ることが出来るのである。

出生地は広範囲にわたり、彼ら家族の移動の激しさを示している。外海よりの移住のみならず、迫害を避けて五島  
内各地の移動、中には配流先での出生もあり、一家で子女の出生地が二・三カ所にわたるものも少なくない。結婚に  
よる移住も当然あるが、当代農漁村の一般的常態とはその点著しい差違が認められる。これを本人二九二名につい  
て見ると、その九割までが中通島を中心とした五島各地の出生で、移住からすでに二・三代を経た者が大部分を占め  
ている。それらの出生地を表示すれば第2表の如くである。

左表から記載不明瞭のため除いたもの恒父母・父母で四三名、本人で七名。全く不明のもの一七名があるが、すで  
に死没した父母らの殆んど全部は外海地区出身と推定して差支えあるまい。これら移住者の出生地は黒崎村の出津、牧  
野、黒崎、永田、浜、赤首、神浦村の大野、神浦、三重村の三重、三重田、樺山諸部落を加えると、判明全数の九四

【第2表A】 出生地別表 (五島列島)

地 名	恒父	恒母	本人	計
川福里袋浦曾水口島子島仙串浦根浦浦串知浦目内島松島島水江見浦里切浦尾松	4	0	2	6
有有今江大大極頭鹿黒高小宿曾鯛竹立中中七奈奈二麻留本給賀久日冷福福藤船古堀真丸若	0	3	1	4
	5	1	1	11
	0	2	2	2
	1	1	2	4
	2	0	2	4
	0	0	8	27
	0	1	1	2
	0	1	1	2
	2	5	1	8
	1	2	0	3
	6	1	39	46
	1	6	75	82
	6	1	18	25
	1	0	0	1
	0	1	0	1
	1	1	0	2
	1	2	0	3
	0	0	1	1
	3	3	3	9
	1	2	1	4
	1	0	4	5
	4	1	1	6
	1	0	5	6
	0	0	0	0
計	64	256	320	

明治迫害期における切支丹社会の考察

## 明治迫害期における切支丹社会の考察

〔第2表B〕 出生地別表 (外海地区)

地 名	祖父	父母	本人	計
赤池	8	0	0	8
大窪	2	0	3	2
大窪	46	0	0	49
大窪	2	2	1	4
大窪	0	1	0	1
大窪	17	0	0	17
大窪	1	0	0	1
大窪	2	3	4	5
大窪	58	6	6	62
大窪	69	4	6	75
大窪	10	0	0	10
大窪	1	3	4	4
大窪	1	0	0	1
大窪	39	3	0	42
大窪	1	0	0	1
大窪	4	0	0	4
計	262	29	291	
A + B	326	285	611	

- (1) 神浦は有川村南端の部落他五島各地にあり、本人の場合神浦は五島であるかも知れぬ。
- (2) 黒島も各地にあるが、諸事情から北松浦郡のそれと考える。
- (3) なおこの表には便宜上、平戸、大村なども含めた。

・五%を占め、外海地区とは云え、この三カ村に限定されていると云つて良い。特にその中、出津、牧野、神浦、大野の四部落が中心をなしていることは第2表Bを一覧して知られよう。なおこれによつて五島キリシタンの習俗が、これら外海の三カ村と共同の伝統を持つことが実証し得るわけである。

## IV 洗 禮

御水帳記載人物の受洗年度は第3表に見る如く、男一、女二四名の不記載、記入不完全の者計三五名のうち、大よその見当のつく者もあるが、それらを省いて考察してみると、まず一八六四年の七名はキリシタンの復活以前の受洗者であるが、それらは潜伏時代の洗礼の合法性を認められた者であろう。その後正規の受洗者は漸増して一八六七年に四〇名という一つのピークを形成していることが注目される。これは同年ドミンゴ松次郎らの要請によりクーザンが再度にわたり始、頭ヶ島に潜入した結果であるに違いない。迫害が直接加えられた一八六八年にもなお一六名の

〔第3表〕 受洗者年度別表

年度	男	女	計	%
64	4	3	7	2.7
65	4	4	8	3.1
66	9	7	16	6.2
67	20	20	40	15.6
68	5	11	16	6.2
69	0	4	4	1.6
70	5	4	9	3.5
71	18	13	31	12.0
72	35	29	64	24.9
73	9	11	20	7.8
74	12	10	22	8.6
75	8	4	12	4.7
76	2	3	5	1.9
77	1	2	3	1.2
計	132	125	257	100
不明	11	24	35	
再計	143	149	292	

受洗者があつた。そのうち三名の娘は浦上まで出向いて受洗している。一八六九年になると逃亡生活のために、さすがに激減しているが、再び増加して一八七二年、即ち迫害も漸くゆるんで来た明治五年になると最高のピークを形成、六四名、二五%の受洗者が出ている。

その後の受洗者は新生児を主とした人口の自然増加的なもので、一〇才までの受洗者を一応親の信仰による受洗として、その数と成年受洗者とを表示すると第4表の如くなる。

〔第4表〕 幼児受洗年度別表

年度	幼児	成年	計
64	5	2	7
65	8	0	8
66	14	2	16
67	28	12	40
68	7	9	16
69	4	0	4
70	7	2	9
71	7	24	31
72	15	49	64
73	11	9	20
74	14	8	22
75	12	0	12
76	5	0	5
77	2	1	3
計	132	125	257

この第3・4表によつて注目されることは潜伏切支丹として信仰を固守し、記録類に邪宗徒と明記されているような者でもなお洗礼を受けていない者が大部分を占めること。そして迫害

時代に成年者の受洗は少なく、しかも子供らには洗礼を早く受けしめていること。それら親の受洗は大部分が迫害のゆるんで来た一八七二・七三年になされていること。そしてこれにより潜伏者の中、カトリックに帰正する者は、即ち「はなれ」として残らず、いわゆる新式のパウチズモを受け直して帰正する者は、殆ど一八七二年をもつて帰正し終

## 明治迫害期における切支丹社会の考察

り、一八七三年以降の成年受洗者一八名は、七三・四年度各三名が二〇才以上である他は、二〇才前後の青少年で占められていること。七三年からは迫害の終結に加えて信者家庭が成立し、新来宣教師の教育もあつて子が生れると直ちに正式に洗礼を受けしめるようになったことなどが推知される。

そこで受洗年令を見ると第5表の如くなる。即ち親の信仰による、三九名のうち一才が一〇〇名、三九%を占

〔第5表〕 受洗年令表

年 令	男	女	計	%
0~1	54	46	100	38.9
2~5	11	18	29	11.3
6~10	4	6	10	3.9
11~15	5	7	12	4.7
16~20	13	12	25	9.7
21~25	11	9	20	7.8
26~30	11	7	18	7.0
31~35	6	3	9	3.5
36~40	2	5	7	2.7
41~45	6	2	8	3.1
46~50	6	2	8	3.1
51~60	2	5	7	2.7
61~71	1	3	4	1.6
計	132	125	257	100

め、五才未満を合算すると五〇%強となる。一六・二〇才の回心年令期はやや高まつており三〇才までに至る。三一才以上五〇才に至るまで当然死亡による減少（第6表A参照）があるにかかわらず、三%前後の数を維持していることは、彼らが婦正者であるため、その年になつて始めて信仰心を持つた者ではなく、正統の受洗年令を示すものであらう。

受洗者の平均年令は幼児受洗が多いため当然低くなるが、一方第5表で見ると高令の受洗者も現今の教会に比して高率を示すので、平均値においては余り差がない。

即ち男は一五才強、女は一四・七才弱。平均一四・九才である。

## V 性別及び年令構成

現今の都市教会はカトリックもプロテスタントも一般的に女性が極めて多く、かつ青年層が多いとされている。

〔第6表A〕 御水帳年令構成表  
(1877年現在)

年 令	男	女	計	%
1~5	36	19	55	18.8
6~10	11	24	35	12.0
11~15	18	22	40	13.7
16~20	10	20	30	10.3
21~25	13	8	21	7.2
26~30	12	11	23	7.9
31~35	10	12	22	7.5
36~40	9	10	19	6.5
41~45	4	6	10	3.4
46~50	7	5	12	4.1
51~55	7	3	10	3.4
56~60	2	3	5	1.7
61~65	2	2	4	1.4
66~70	1	1	2	0.7
71~76	1	2	4	1.4
計	143	149	292	100

それはミサ・礼拝出席者から云われていることで、所属会員においてはそれほど甚だしくはないけれども、教会の会員構成としては不健全であることは言を俟たない。特にカトリックが都市知識層に普及したのは比較的に遅く、ようやく大正期に入つてからであつたから、<sup>(1)</sup>高年者のパー

センティジが低いことは当然推定されることである。これらの会員構成が日本人口構成率と同様であること

とが、教会としても健全な形態でなければならぬ。この現代教会の人口学的問題については他の機会に譲るが、御水帳による信者構成は（第6表A）そうした点では健全な形を示している。

〔第6表B〕 魚目・青方村調査  
年令構成表 (1872年現在)

年 令	男	女	計	%
1~5	15	14	29	7.5
6~10	10	11	31	8.1
11~15	22	22	44	11.5
16~20	22	15	37	9.8
21~25	20	17	37	9.8
26~30	27	21	48	12.5
31~36	17	18	35	9.1
36~40	18	12	30	7.8
41~45	10	9	19	4.9
46~50	16	10	26	6.8
51~55	4	5	9	2.3
56~60	9	7	16	4.2
61~65	6	5	11	2.9
66~70	8	4	12	3.1
71~80	0	0	0	0.0
81~90	0	1	1	0.3
計	214	171	385	100
不明	0	1	1	
再計	214	172	386	



〔第6表C〕 青方地区信者年令構成表 (A+B修正)

年 令	男	女	計	%
1~5	26	38	64	10.3
6~10	38	33	71	11.5
11~15	32	42	74	11.6
16~20	35	23	58	9.4
21~25	32	28	60	9.7
26~30	37	33	70	11.3
31~35	26	31	57	9.2
36~40	22	18	40	6.5
41~45	17	14	31	5.0
46~50	23	13	36	5.8
51~56	6	8	14	2.3
56~60	11	9	20	3.2
61~65	7	6	13	2.1
66~70	9	6	15	2.4
71~80	0	1	1	0.2
81~90	0	1	1	0.2
計	321	299	620	100

この調査と御水帳とを合算したものがほぼ青方天主堂所属信者の構成を示すであろうが、両者の記録には五年の距りがあるので、今仮りに御水帳から五年を減じ(従つて五才未満の者は加えないで)合算、表示して見ると左の如くなる。もちろん御水帳に記載すべき人物でその五年間に死失した人物が加えられねばならぬ上、調査は女一

〇〇に対し男は実に一二四・四と、男女比において大差があり、その前後の諸調査に比して非常に高い率を示している(第7表)、論拠とする統計として不十分なもののようではあるが、青方地区を含む福江藩の一八六九、七一年のそれもこの調査ほどではないが一三・四の高率を示しており、まず一応の目安と見ることは許されるであろう。

明治初期の年令構成を語る資料に接しないので、使官上一八九一(明治二四)年の全五島の調査による全五島の百分比を例示し、参考として一九五〇年度の国勢調査による長崎県の百分比を例示したが、それと対比して見て、御水帳では(1)一五才の出生の多いこと、(2)六一〇才が一五才より少ないこと、(3)四〇才以上において少ないことなどが目につく。(2)の六一〇才の低率は限られた数であるため、たまたま男生児が低かつたこととが(第6表A参照)顕著に現れたことにもよるが、何よりも彼らの生年である明治初期の迫害が影響しているものと考ええる。迫害下の一八七二年の魚目青方村調査も一〇才以下の過少著しく、特に一五才は僅か七・五%にすぎ

〔第6表D〕 各資料年令構成百分比表

年 令	青 方 地 区				五島本籍者 一八九一年	長崎県(国勢調査) 一九五〇年
	資料 一八七二年 魚目青方村調査	御水帳 一八七七年	修正資料表 右二資料	資料		
1~5	7.5	18.8	10.3	12.1	14.7	
6~10	8.1	12.0	11.5	10.7	11.3	
11~15	11.5	13.7	11.6	10.9	10.6	
16~20	9.8	10.3	9.4	10.4	10.1	
21~25	9.8	7.2	9.7	8.6	9.1	
26~30	12.5	7.9	11.3	8.1	7.6	
31~35	9.1	7.5	9.2	7.0	6.1	
36~40	7.8	6.5	6.5	6.6	5.7	
41~45	4.9	3.4	5.0	5.7	5.1	
46~50	6.8	4.1	5.8	5.0	4.6	
51~55	2.3	3.4	2.3	3.6	4.1	
56~60	4.2	1.7	3.2	3.3	3.3	
61~65	2.9	1.4	2.1	2.7	2.6	
66~70	3.1	0.7	2.4	2.0	2.0	
71~80	0.0	1.4	0.2	2.4	2.4	
81~	0.3	0.0	0.2	0.8	0.6	

高年層の寡少は魚目青方村調査と合算修正すれば特に取立てていうほどのものはないようで、小計数のためたまたま現れたものであらう。

男女の性別比は御水帳ではやはり小計数のため各生年層において不同があるが、全般的には顕著でなく、女二〇〇に對し男九六・三、一九五〇年国勢調査における長崎県の九七・四よりやや低い、全国他とは全く同率で、封建時代の一般的情勢に比して極めて健全であると云える。しかし同じ福江藩全体のキリタン社会では前に一言した如く一八六九年に一一三・二、七一年に一一四・三を示し、七二年の魚目青方では一二四・四という高率を示している。同年の肥前国の男女比は一〇三・二であり、これらキリタン社会では女性が非常に少ないことが知られる。

## 明治迫害期における切支丹社会の考察

一八

こうした現象が何によつてもたらされたか。江戸時代人口史の研究においてはこれらは間引をもつて説明される。例えば植村氏の研究による唐津藩の安政五(一八五八)年計数によると男は一三八・七にも達しているが、これなどは氏も指摘される通り、まさに間引の悪結果に他ならぬであらう。<sup>(5)</sup> 福江藩キリシタン社会もまたその例に洩れぬように見える。明治四年五月「異宗徒人口戸数并死生出生調目録」によると、一八六八年九月からの二年半に出生は男三一、女二六に対して、死亡は男二四、女三九名。人口増減で男七の増、女一三の減、差引六名減という数字が出る。しかしキリシタン社会では宗教倫理から間引は殆んど考えられない。右の計数も女児間引は出生数には現われぬであらうから、女性死亡の高率は嬰兒のそれを示すものではないことに注意せねばならぬであらう。そして御水帳を見ると、キリスト教倫理がより徹底した迫害終息後の三カ年間に却つて女児が少なく、迫害期及びそれ以前において女子が多いのである(第6表A参照)。調査では女子の少ない年令層も目につくが、小計数のための現象で一般的にはほぼ正常と見てよいように思われる(第6表B参照)。両者を調整した第6表Cを見ても小計数のために避けられぬ凹凸はあるが、一八七二年現在一五才、一一一五才において女児が多く、復活キリシタンにあつて間引は殆んど全くなかつたものと推定してよいようである。むしろこの表から青年層以上において女性が少ない特徴を見ることが出来る。彼女らの出生時、即ち封建制下の潜伏時代において、たとえ若干の間引があつたと認めるとしても、こうした女性の過少現象には、他の社会と異なる原因が存したことを指摘せざるを得ない。即ち前掲明治四年五月の目録によると一八六八年秋、福江藩中において最初に迫害の患に見舞われた久賀島において一年間に全員の八分に当る二八名の病死者を出しているが、内訳は男七、女二一と、女性三倍の死亡者を出しており、その後一八七一年春までに男四女七の死亡者を加えている。<sup>(6)</sup> これらの大部分は單なる病死とは到底考えられない。この目録では御水帳に含まれ

〔第7表〕 諸資料男女百分比表

性別	長崎県		青方地区		一九五〇年		国勢調査	
	男	女	男	女	男	女	男	女
唐津藩(植村氏)一八五八年資料	33,586	24,221	138.7	103.2	113.2	114.3	124.4	96.3
肥前国(高橋氏)一八七二年	545,662	528,798	103.2	113.2	114.3	124.4	96.3	103.3
福江藩切支丹信仰者一八六九年	584	516	113.2	114.3	124.4	96.3	103.3	101.1
福江藩異宗徒人口一八七一年	822	719	114.3	124.4	96.3	103.3	101.1	92.8
魚目青方村調査一八七二年	214	172	124.4	96.3	103.3	101.1	92.8	97.4
御水帳一八七七年	143	149	96.3	103.3	101.1	92.8	97.4	
全五島本籍調査一八九一年	38,666	37,440	103.3	101.1	92.8	97.4		
全五島人口調査一九二七年	55,262	55,628	101.1	92.8	97.4			
一九五〇年	812,079	833,413	97.4					

明治迫害期における切支丹社会の考察

一九

る地区は僅かに三軒九名しか扱つていず、他は出奔のため別帳にされ生死を明らかにしていないが、御水帳と魚目青方村調査に現われた女性の過少も同様迫害に伴う現象ではなからうか。計数が小さい上に男子が出漁、女子が起伏の多い山地瘦地の農耕という当地の条件などについての研究も進めなければ決定的なことは云えないが、迫害拷問、そして潜伏逃亡の生活において女子の死亡率が高まつたというような特殊な事情が存したのではなからうか。一応仮説として提示し、今後の研究に俟たいと思う。

註 (1) 拙著「現代日本宗教の史的性格」二五頁参照。

(2) 久保清・橋浦泰雄氏共著「五島民俗図誌」二五—三〇頁所載計数による。

(3) 高橋梵仙氏著「日本人口史之研究」附表「全国人口表(第四表)」による。

(4) 平時における統計として一八九一(明治二四)年の全五島本籍調査(「五島民俗図誌」による)では一〇三・三、一九二七(昭和二)年では一〇・一であつたが、一九五〇(昭和二五)年の戦後の青方地区の国勢調査では実に九二・八と、全国に比して極めて低い率を示している。

(5) 植村平八郎氏「唐津藩の育子政策」(経済史研究四九)

(6) 五島における信者人口動態については姉崎正治博士が、これらの史料を利用して「五島異宗人魚の変遷」(「切支丹禁制の終末」

附録)に言及されている。

VI 婚姻関係

家族関係については極めて複雑なものがある。それは何と云つても移住民であるため五島迫害が外交問題と化した家族関係については極めて複雑なものがある。それは何と云つても移住民であるため五島迫害が外交問題と化した一八六九年十月、長崎県野村知事と渡辺弾正大忠(并)から外務大少丞宛に送つた答申書に附された六月付の別紙に元来彼地人員寡少、諸国より渡来者を止置き……壱田開島を教候者を居食者と唱へ、諸国に所謂入百姓の類にて、従来の国人等は大に此徒を早しめ、縁組は勿論親睦をも不結、別種のものゝ如く被取扱候者<sup>(1)</sup>とあるように特殊部落の取扱ひを受けた結果、自然移住者間の通婚が多くなされたためと見られる。が、またその別種の如く取扱われた理由に方言、習慣の相違があり、その最大のものとして潜伏切支丹の伝統的宗教行事・習俗のために相互に相容れぬものがある。いわゆる昭和の潜伏キリシタンですら他郷者を警戒するように、彼ら移住者が始めから自ら門戸を堅く閉じることも多かつたからと考えられる。

御水帳により婚姻関係を出身地別に表示すれば第8表の如くであるが、第2表とともに五島出身者として統計上に現われる者も、殆んどすべては外海からの移住者の子孫であることを注意しなければならない。不明を除き夫妻出身地の知られる者、再婚を含め三世代にわたり二二五組、三世代とも似た数値が得られる。(このことは血縁関係の多いことを示すものである)。彼らのうち大よそ祖父母の世代に五島へ移住した者が三二%を占める。そのころは外海において同部落の婚姻がその世代の絶対多数八〇%、異部落を合せ実に九五%を占め、信仰を論外としても封建時代農村の「手文」<sup>(2)</sup>に、さら、父より世代になると同じ外海地区でも異部落間の婚姻が同数行われていることが知られる。

〔第8表〕 出身地別通婚表

出身地	祖父母	父母	本人	計	%
外海地区 同部落	62	24	4	90	39.4
外海地区 異部落	11	24	9	44	19.2
外海五島間	2	18	24	44	19.2
五島地区 同部落	1	3	10	14	6.1
五島地区 異部落	1	5	31	37	16.2
計	77	74	78	229	100
不明	11	6	2	19	
再計	88	80	80	248	

外海地区にはその周辺平戸及び上野国の男一例などを含む。

この世代は移住者の子を含んでいるから外海・五島地区間の婚姻数も漸く多くなっているが、移住者本人も多く、外海地区同志はなお六五%を占めている。本人の世代になると外海地区同志の者、即ち移住者本人は一七%弱にすぎず、これに反し五島地区同志は五四%を占めるようになる。これらもまた父母の世代の八例も実際上は後記する実の婚姻でないものを合せて九例を除き外海地区出身者と称すべきものである。そして世代を下るごとに異部落間の通婚が増加している現象が見られるが、ことにこれら移住者の子孫である本人において著るしい。それは五島への移住のみならず、生活や迫害のため島内においても移動が激しかつたこと、他部落に移住した外海地区出身者の子女との縁組が多く行われたことなどを物語る。

第8表のうち注目されるのは五島地区祖父母二例の縁組であり、年代的に移住者の二代目とは考えられぬわけである。そうだとすれば五島の土着民で潜伏下に入信した稀有の例となるわけである。(現存者もあるので、霊名と御水帳登記番号をもつて例示する)。その一例はアリシヨ(ハ一九〇)ドメナ(一九一)夫妻の相父母で、アリシヨの母ドメナとアリシヨの妻のドメナの父トマスは姉弟で、真手浦のキリシタン両親から生れている。これはそれぞれ移住者の子を配偶としたことによりキリシタンとなり、その祖父母もキリシタンに接し入信するに至つたかと考えられよう。他の一例はトマス(二二五)の一族で、その父ジンは久賀島生れ、母イザベリナは今里生れであるが、父方の祖父

母の出身地の記載がなく、これは恐らくやはり移住者と目すべきものである。母方の祖父とく右衛門は今里、祖母は宿浦で、これは土着民の如くであり、靈名の記載もなく、キリシタンでなかつたかの如くである。しかし寛政移住者の中、宿浦に配置された者に徳右衛門なる者があり、同一人ではあるまいかと考える。とすれば御水帳記載は出身地でなく居住地を記載したものと見られ、すでに死亡した祖父母、父母の世代にはそうした誤載が他にもあるのではなからうかとも考える。前掲のアリシヨ母方の例の如きもあるいはそうではなかつたかと疑われる。殊に次のべる如くこうした初期に外海と五島諸間に通婚がなされる可能性は極めて少ないはずである。そうだとすれば五島地区に掲げた五一例も殆んどは移住者同志と見てもよいであらう。

さらに注目すべきは移住者と土着者との通婚例である。土着民が移住者を屋敷者と特殊部落視していたことから見て、こうした縁組がなされたことは興味ある現象でなければならぬ。しかし五島生れの者と移住者との通婚四四例も、以上述べて来たところと変えることはなく、五島生れといつても移住民の子孫なのである。それらのうち江袋出身の二名の祖母を除き、父母乃至は祖父母の記載がないため純然たる通婚例の如くに見えるに過ぎず祖父母は移住者であつたに違いない。ただ江袋出身の二例のうちマタレナ(四三)の父方の祖母マリアが問題になる。祖父デワンは神ノ浦出身の移住者である。江袋・中知地区は中通島でも五島藩からは分轄されて平戸藩の支配下にあり、マリアは同地土着民の如くである。また別のマリア(一〇〇)の祖母イサベリナがあり、大野のジワンと結婚、マリアの母を江袋で生んでいる。しかしマタレナの父トマス54またマリア44の母も、その年令から考えて、両例の祖母はともに、なお初代移住者の娘である疑いを持ち得るし、一八二・三〇年代の結婚とすると、そうした早い頃純然たる移住者と土着民との縁組の可能性も疑わしい。しかし平戸藩配下では五島藩と異なり、移住者を招いたわけではなく、「縁組は

勿論親睦をも不結、別種のものゝ如く」取扱うような他郷者に対する特別な偏見・蔑視の感を持つていなかったのかも知れぬ。<sup>(3)</sup> 移住熱に燃えた平戸領に移住した神浦出身者が相当あつたらしく、トマスの妻、即ちマタレナの母デワナには中知生れであり、その祖母イサベリナは神浦出身である。(祖父ロレンソの出身地はないが、これも神浦出身と推定される)。彼らも一応土着民の入信者として注意すべきであるが他の御水帳に記載されているものと思われ、それを見るに出来れば、土着か移住者の子であつたかが明らかになるはずである。この二例を除きすべては移住民及びその子孫、即ち潜伏切支丹の縁組ということになる。

彼らの郷里外海地区では離婚と墮胎と偷盗だけは、世界の終りにも赦されないとキリスト教倫理を云い伝えて来たが、<sup>(4)</sup> 事實は彼らの間では離婚が<sup>(5)</sup> また再婚が頻りに行われ、また異教徒との縁組を嫌うため自ら姻戚間の結婚が極めて多く、殊に血族結婚は当時宣教師らが困惑した問題の一つとなつていた。<sup>(6)</sup>

頭ヶ島の水方でさえ離婚していたというほどであるから、<sup>(7)</sup> 婚姻の秘蹟としての教理は彼ら潜伏切支丹の間には殆んど全く忘れられてしまつたことが察せられる。田北氏が五島禁留島で得られた「御らつしよ」に結婚関係の行事、オラシヨがないのもそれを示すであらう。<sup>(8)</sup> 潜伏切支丹または現今のはなれ切支丹の結婚儀式が如何に行われているか未だ調査の機を得ず、こうした秘蹟性の保持が司祭のない時代に如何に転化変形して行くかの問題は今後の研究に譲らねばならない。

しかしこの御水帳にすでに司祭の下にある一八七七年のものであるから、実の父・母というように合法的婚姻によるべきことが本体となつており、そうでない者の場合、実父母記入欄の中央「此両方実の婚姻の人」というところを墨で囲み実の婚姻でないことを示した例若干を見出す。但しそのうち孤児が三例あつて、両親の名がない者(一二七)

や、名はあつても霊名がない、従つて信者ではないと推定される者(二三、九八)などで、ここでは当然除外されるべきものである。残る九例のうち一例を除きすべて五島に着民との結婚関係である。その一例(二一六)の父は空欄で記載がなく、これも五島土着民を思わせる。結局全部は移住者の子孫、五島生れのキリシタンの女と五島の未信者との結婚関係で、まず教会法的に非合法なのであると思われる。ただカラナ(二五三)の夫マチャスは両親とも未信者と推定される五島出身となつており、土着民とすればその入信は前述の如く稀少例である。この一組が非合法となつている理由は不明であるが、内縁関係なのであろう。

移住者との間に縁組をしないという報告にもかかわらず、五島民が信者の女と縁組した九例を数えるのであれば、注目すべきことであるが、そのうち王例は、女がのちに移民子孫のキリシタンと再婚して合法とされている。離婚による再婚は教会法で認められないのであるが、前記の如く潜伏信者間に離婚が多く行われており、これらも正式に教会に帰正する以前の離婚並びに再婚で、司祭により特に認められたものであつたとも考えられよう。しかしそれがキリシタンの女性側のみであるところに問題が潜みそうである。五島の未信者の男の悪業であつたか否かは論ずる限りではないが、そうした例も含まれていることであらう。ただこの中に一例、明らかに女の不倫関係を指摘することが出来る。

御水帳による近親結婚は鯛ノ浦のミカエル(五七)とマクレナ(五八)、前出のアリシヨ夫妻の二組が従兄妹関係にあるだけである。尤も本人関係のみしかこの御水帳では判明しないので、他の御水帳と対照したり、世代を溯ることが出来れば、なお血族結婚の例を見出すであらう。それにしても本人縁組八〇の中の二組ということは決して低い率ではない。しかもカトリックでは従兄妹の結婚は是認されないのである。しかしミカエル夫妻は54と52才、アリシ

ヨ夫妻は35と34才、長男が13才であるから、結婚は一八六三年以前で、直接宣教師の指導を受ける以前であつたことは疑いない。

それは兎も角、キリシタン同志の結婚、そして数部落にわたり殆んど全員が近い親・姻戚関係にあること、即ち五三世帯を親子・兄弟関係によつてまとめると一九、近い姻戚関係によつてまとめると一一のグループとなる。更に出生のトマス市郎の家系に属する者六四名、姻戚を含めると実に本御水帳記載の本人二〇〇名、即ち全数の六八・五%を示す。他の青方教会の御水帳があれば、なお姻戚関係によつて結ばれていることが知られるであらう。従つて教会に要するにみな親類であり、現今の都市教会と異なり、教会生活から見る時、名実ともに深い信仰による交りになつていたことが察せられ、それが弾圧下にも信仰を維持するに最大の効果を發揮したものだと思われしめられる。江戸三百年の、あるいは明治初期の迫害にも堪え抜いて存続したのも、指導者を転々と隠したのも、この緊密な姻戚関係による教会組織の結合力が与つて力あつたに違いない。

なお現今の「はなれ」社会の親・姻戚関係は未だ調査されていない。今なお神仏と混淆した特殊な信仰行法を保持している彼ら社会における結婚は重大な問題でなければならぬ。有志者の調査を期待してやまない。

註

(一) 浦川師「五島キリシタン史」一一三頁。久保・橋浦両氏共著「五島民俗図誌」三九、一三八頁に昭和九年においてもなお殆ど異教徒と交際がないという。なお「居食」の字が宛てられており、明治三年の「鯛ノ浦居食改帳」や田北氏の如く「居食」が宛てられたりするが、定住の意には限らず、むしろ「居食」が正しいであらう。

(二) 浦川師「復活後篇」一九二頁。

(三) Marus, op. cit. II, p. 166. によると五島から平戸に追放された者があるというが、日本側史料には見当たらない。追害を避けていわゆる出奔したものである。平戸といつても中通島北部の平戸領(北郷目村に当る)で、同郷出身者が早く移住し、あるいはこうした姻戚関係にあつたことが与つていゝるであらうと思われる。

- (4) 浦川師「復讐篇」三四九頁。キリシタン時代の婚姻については拙著「切支丹の社会活動及商業変遷」二八〇頁以下参照
- (5) 浦川師「復讐篇」三四九—三五〇頁。
- (6) Marnas, op. cit. I, p. 503.
- (7) 田北氏前掲書二二三頁。
- (8) なお「五島民俗図説」一四九—一五一頁に記す結婚習俗は現今カトリック教会のそれで五島に限るものではなく、民俗として採り得ない。一七一—一七三頁の葬儀に因しても同様である。

## VII 家族構成

右に見た如く合法と認められるものであつても離婚・再婚による複雑な家族はこの御水帳を通して他にも多くの例を挙げることが出来る。その最も甚だしい例として鯛ノ浦のシモン(一二九)を見出す(この項は霊名のみで記す)。彼は実に三回結婚しており、その二度目の妻ジワナンもまた三回目の結婚である。彼はまず鯛ノ浦のイサベリナと結婚、カチリナ(二六)を生んだのも、恐らくイサベリナの死去によりジワナンと再婚した。彼女はシモンより遙かに長と覚しく、ジワナンの先夫との間の子ロレンソ(七〇)は43才であり、イナシヨと再婚してミゲル(一一五)とバステヤン(二九)とを生み、そして三度目のシモンとの間にアリシヨ(六七)を生んだのである。一方シモンも三四目にカチリナ(一一三〇)と結婚、トマス(一一三二)以下五子を挙げている。

また御水帳と対応すべき長崎図書館所蔵明治三(一八七〇)年十月の「切支丹宗廟之浦居着改帳」を見ると、トマス(一〇三)は御水帳記載のカチリナと結婚、カチリナ(一一三)とドメナ(一〇七)の二子を挙げたのち、改帳記載の女房ぬわと再婚。さらに御水帳記載の妻イサベリナ(一〇四)と結婚。ペトロ(一〇五)とミカエル(一〇六)の二男を挙げている。ぬわとイサベリナとの誤記とは思えぬから、結局三婚したものであろう。

またペトロ(九〇)とズリイナ(九四)夫婦は御水帳では初婚の如くであるが、この居着改帳を見ると女房とき二十九才とあり、ついでこれまた二度目のズリイナと再婚したものである。

こうした有様であるから、居着改帳によつて知られる右二例を加え、五三世帯のうち三婚・再婚者は男六、女九、計十五名。連子のある世帯一〇。男女とも子を連れて結婚、いわば三種の子を抱えた一家があるなど、実に一八・九%はこうした複雑な家庭である。

第9表Aは養子をも戸主として、常識的に男系家系によつて整理したものであるが、この御水帳は父の隠居及び同居居家族が否かを明らかにし得ず、記載番号によつて家族を纏めたものである。

これに対し改帳と対照すると、これは再婚・連子は明らかにし得ないが、これは意外なほど父の隠居が多く、九一世帯のうち一八世帯、約二〇%を占める。また兄弟及びいわゆる厄介者など労働力を持つ男子の同居が多く、右の御水帳計数とは著しい対照をなす(B表参照)。この両地区には半漁半農と農業経営と区分するほどの相違はなく、

〔第9表A〕御水帳家族構成表

世帯主トノ関係	男	女	計
世帯主	53	0	53
妻		43	43
子	67	57	124
子ノ夫妻	4	12	16
孫	1	4	5
祖父母	6	3	9
父母	0	2	2
兄弟	0	10	10
兄弟ノ妻	8	12	20
甥姪	0	1	1
独立ハベ	4	5	9
計	143	149	292

〔第9表B〕魚目育方家族構成表

世帯主トノ関係	男	女	計
世帯主	91	0	91
妻		76	76
子	66	56	122
子ノ夫妻	0	4	4
孫	3	0	3
祖父母	0	0	0
父母	18	21	39
兄弟	27	8	35
兄弟ノ妻		2	2
伯叔父母	0	1	1
甥姪	4	2	6
同居者	5	2	7
計	214	172	386

〔第9表C〕 青方聖堂区家族構成表

世帯主ノ 世帯関係	男	女	計
世帯主	144	0	144
妻		119	119
子	133	113	246
子ノ妻	4	12	16
孫	1	8	9
祖母	9	3	12
父母	0	2	2
兄弟	18	31	49
兄弟ノ妻	35	20	55
伯叔父母		2	2
甥姪	0	1	1
同居者	4	3	7
独立世帯	5	2	7
父ノ世帯	4	5	9
計	357	321	678

その因由はなお研究を要しようが、これから推しても御水帳記載家族も事実はA表に示された以上に複合した構成を持つことが推定されよう。それで幾分でも近い数とするために試みに青方聖堂区として両者を加え、一応の目安として示せばC表の如くなる。

第9表のうち独立世帯または孤児として掲げた者

も、いずれはどれかの家庭に同居、または教会に保護されていることと思うが、それらのうち孤児四名を除くと五八世帯二八八名。一世帯四・九七名。四名がいずれか世帯に吸収されているとすると五・〇三名となる。彼らを含む福江藩の「明治二巳年切支丹信仰之者惣人数付」及び明治四年五月の「黒家徒人口戸数并死生出入調目録」記載計数を訂正して算出すると、前者は一世帯四・一八名、後者は五・三名であり、明治五年の魚目青方村調書では四・二四名という低率を示す。即ち各調査において相当の増減があり、調査の誤謬も含まれてもいようが、同時代の一八六九年五島嶺の平均五・二六名より概して低く、いずれも封建時代以来の農村世帯としては余り高くないと云える。

これら居食者の経済状態は「鯛ノ浦居改帳」記載七軒の中、五軒が龜百姓（二軒は無記入）であり、彼らの大部分は同地方において社会的にも農民層の最下位にあつたことが知られる。<sup>(1)</sup>そして久保・橋浦両氏の調査にも報ぜられるように、一九三四（昭和九）年においても依然著しく低い。<sup>(2)</sup>しかし家族構成は一八九一（明治二四）年の調査によると、有川村の中でも富裕な古い部落の赤尾の九・三四名に比して、外海移住者を主体としカトリック及び古キリシ

タンの多い鯛ノ浦は七・一二、頭ヶ島は八・二一、青方は六・九一名とやや低いものの、なお全五島平均五・五八名より、はるかに高い率を持つている。なお一九二七（昭和二）年現在御水帳関係四ヶ村を見ても六・四名、一九三四年現在で六・六九名を示している。<sup>(3)</sup>（第10表参照）。

即ち一八七七年御水帳までの頃、これらの部落において家族構成員が低率を示すに對し、僅か十四年を経た一八九一年には既に極めて高い率に達しているのである。たとえ居食者として土着住民に比してはなお経済的条件に恵まれていなくても、同地区が人口少なく、荒地開墾の努力さえすれば自作地を獲得出来るという有利な点と、カトリックの墮胎・産児制限の禁が、家族員の高率をもたらしたものである。土着の富裕部落赤尾の高率は経済条件のみならず多家族制的風習の存することが報ぜられているが、<sup>(4)</sup>こうしたカトリック部落で僅か十四年で著るしく家族員が増大する可能性を持つているのに明治初期に現われた低率は何によつてもたらされたであろうか。彼らの半農半漁の零細経営、貧困という理由では説明がつけられない。それはこれら部落がその頃蒙らねばならなかった特殊な事情、即ち宗教的社会的な事情、一つは移住民及びその子孫であるということ、直接的には迫害による出奔、移動生活、はては拷問、入獄そして死亡の高率という事情が作用しているものと考えしめられる。

なおこの御水帳のみをもつて前述の如く家長が隠居か、また結婚年令など推定出来ないわけではないが確認出来ず、また出奔して帰郷せぬ家族員、あるいは出稼ぎ、出入奉公などの関係は全く不詳である。同地区の宗門改帳が見出され、それと合せて考察出来るならば、家族構成はより一層明らかになるであろう。また前述の如く御水帳では同居・複合世帯は明らかでない。しかし明治初期の諸調査に比して、この御水帳世帯員数がほぼ中位を占めることは、私が世帯として記載人員を纏めたものも決して不当な纏めようではないことを示すであらう。一八七二年の調査記載

〔第10表〕 世帯員数表

資 料	世帯数	人 口	一世帯平均
1869 全 五 島	10,498	55,221	5.26
1869 福江藩切支丹	263	1,100	4.18
1871 福江藩異宗徒	291	1,541	5.30
1872 魚目青方村調書	91	386	4.24
1877 御 水 帳	58	288	4.97
1891 全 五 島	13,638	76,068	5.58
青方、魚目、 北魚目、有川	2,705	16,452	6.08
1927 全 五 島	17,883	111,800	6.26
青方、魚目、 北魚目、有川	3,705	23,710	6.40
1924 全 五 島	19,762	115,170	5.82
青方、魚目、 北魚目、有川	3,968	24,353	6.69
1950 全国郷部			5.37
青方、魚目、 北魚目、有川			5.54

は、これに比して親族の同居も多く、他人の厄介者を抱えているものも三世帯あるが、しかし世帯平均はより低い(第10表参照)。これらについてはなお多くの資料統計と、人口学的言及も必要であるが、余りに繁雑にわたるのであえて省略し、次に世帯構成の百分比を示すにとどめる。

〔第11表〕 世帯構成員数百分比表

資料	一八七二年	御水帳 一八七七年	長崎 一八七〇年
1	0	8.6	5.4
2	12.1	8.6	11.0
3	22.0	3.5	15.4
4	29.7	19.0	15.8
5	20.9	24.1	14.6
6	6.6	12.1	12.4
7	4.4	13.8	9.7
8	1.1	1.7	7.0
9	1.1	6.9	4.3
10	2.2	1.7	2.4
11~	0	0	2.0
世帯平均	4.24	4.97	4.89
備 考		孤児四名を除く	澤世帯を除く

註

- (1) 久保・橋浦氏共著「五島民俗図誌」四九三―四九四頁。
- (2) 同七二―七三頁。
- (3) これらの算出基礎は前掲書二二―二五頁所載統計によった。
- (4) 前掲書四六九―四七〇頁。
- (5) 関係四カ村のうち魚目・北魚目は最も低いが、なお全五島より常に高率を示している。一九三四(昭和九)年の統計は軍需産業に伴う都市吸引・出稼・出征による社会減が著しく現われたものと認められ、同年度において不在人口は実に全五島人口の二五%にも達する。一九五〇年はいうまでもなく終戦後五年。これらの諸事情下にもなお四カ町村は常に高率を示していることに注意されたい。

Ⅵ 霊 名

カトリック・キリシタンでは周知の如く聖人名を受洗に際し霊名として数多くのであるが、これら潜伏中おのずから霊名が限定され、少数の霊名のみが残つて来る。それも転訛したものが多くが御水帳記載人物で霊名の記されている者、男三〇六、女三〇二名、訛称を代表的なものに統一して示すとその使用数は第12表の如くである。

即ち男子では二種の霊名が用いられており、そのうちドミンゴス・ミカエルが最も多く、合せて三四%を占め、トマス、パウロ、ジワンなどがこれに次いでいる。本人以外即ち父母・祖父母・水方などの出身地である外海地区ではバスチヤンの日線が殆んど唯一の聖典の如く重んぜられ、バスチヤンが尊崇されているのに、その霊名を頂く者が意外に少ないことが注目される。が、この御水帳は前述の如く一部にすぎないから、これだけで立論するのは危険ではあろうが、それにしても多数でないことは認められて良いであらう。バスチヤン伝説が五島移住者間に忘れられ、ただ暦のみが伝えられていたということと関係するであらう。また本人では僅か一三種の霊名しか用いられていず、



〔第 12 表 A〕 男子霊名表

霊名	本人以外	本人	計
ア リ シ ヨ	3	7	10
アンデレヤス	1	0	1
アントニヨ	3	0	3
アロソソ	1	0	1
イナシヨ	6	17	23
カスバル	1	0	1
サンモフ?	1	0	1
シモソ	4	9	13
ジヤコボ	1	0	1
ジワソ	16	10	26
トマス	18	19	37
ドミンゴス	30	24	54
バスチヤン	2	5	7
バウ	11	17	28
フランセス	2	2	4
ペトロ	11	9	20
マチャス	4	0	4
マルコス	0	2	2
ミカエル	32	18	50
メソ	1	0	1
リイ	2	0	2
コレソ	13	4	17
計	163	143	306

しかもドミンゴス、トマス、ミカエル、イナシヨ、パウロの五種で実に七二・七%強を占める。

これに対し女子では一六種の霊名のうち本人は一五種、むしろ本人外の一三種より増加している。そしてイサベリナ、マリヤで三八・一%を占め、カチリナ、ドメガス、マダレナなどがこれに次ぐ。本人ではイサベリナ、マリヤ、カチリナ、ドメナ、ドメガスの五種で七三・六%を占める男女ともに僅か三・四種で過半を占め、五種類では七三%を示すほど霊名の使用が限定

〔第 12 表 B〕 女子霊名表

霊名	本人以外	本人	計
アカタ	0	1	1
イサベリナ	36	28	64
ウスラ	6	3	9
カチリナ	21	23	44
カラナ	4	2	6
ジワソ	14	11	25
ズジイナ	3	6	9
テカラ	7	3	10
テルスマリヤ	0	1	1
ドメガス	14	14	28
ドナメ	4	17	21
マダレナ	17	10	27
マリヤ	26	25	51
マルダ	0	3	3
ミシヤ	0	2	2
ルリイナ	1	0	0
計	153	149	302

される傾向を持っていたわけである。これは一応聖人祝日を記す暦―日線が簡略化されたためと思われるが、現在知られる潜伏切支丹の諸層本記載祝日の聖人名より多く、かつ転訛も少ない。霊名が聖人の名を頂くことは忘れられ、層とも離れて、父祖伝来のものを習慣的に用いるようになったまでであろう。

特に注意すべきは潜伏時代ばかりでなく、すでに復活後、即ち宣教師から指導を受けているこの御水帳の記録された頃にもなお潜伏キリシタン以来の転訛したままの霊名が用いられていることで、プティジャン司教のキリシタン伝統保存の方針によつたものであろう。<sup>(3)</sup>

註 (1) 田北耕也氏著「昭和時代の潜伏キリシタン」一六八―一七三頁。

(2) 前掲書一七一頁参照。

(3) 司教が復活信徒のためにキリシタン伝統語を使用する方針を持っていたことについては拙著「切支丹典籍叢考」一七六頁以下参照。

## K 帳方と水方

潜伏切支丹が洗礼役をお水方、また教書、オラシヨ、日線(祝日)表などを管掌する役をお帳方と呼んだことは今更いまでもないが、<sup>(1)</sup>未だ洗礼台帳を保管している例を聞かない。厳しい取締りの中に潜伏する彼らが一網打尽を避けてあえてそうしたものを書留めなかつたのかも知れない。が、この御水帳の時代には教書類の出版がなされており、今更それらを保管する必要がなくなり、かつ外海・五島では日線表がむしろ中心をなしたのであるが、<sup>(2)</sup>復活切支丹では一八六八年から正確な暦(瞻礼記)が出版されており、お帳方の役務はもはや矢われ、復活教会では帳方は名簿記入乃至保管の責任者に転化したのである。平戸のにも、青方・大明寺のにも帳方の記入欄があり、後者二種

の御水帳では最初の箇所のみパウロ重右衛門の名が記されている。青方・大明寺とが同一の帳方であることは、どうした理由からかは断定出来ない。

水方は神父不在または授洗不可能の時は一般信者でも授洗出来るカトリックの解釈からキリシタン時代以来、特に迫害潜伏時代に入つてからは当然信者によつて行われていたのであるが、次第に専門化し、世襲の特権と見なされるようになって来た。<sup>(3)</sup>復活時代教会でも、なお禁制下にあるため授洗は容易なことではなく、外人神父の行動は注目を引くためにブレイジャン司教は各地のお水方を再教育し、また邦人伝道士を養成して潜伏切支丹の多い各地に派遣した。

この御水帳記載人物の受洗場所として記入のあるものは「みどふ」即ち御堂が最も多く一〇一、蛤が一六、頭ヶ島が八、浦上五、薩尾島一計一三一名。それらには殆ど水方の記載はなく、恐らくクーザンその他神父による受洗を語るであろう。その他の者には水方または「水を授けた人」の名が掲げられているのに対し、受洗地の記載は一例を除いて記載がない。受洗者の居住地でなされたものと認めて良いであろう。水方の欄に記された者は潜伏時代以来伝えて来た正式の水方で「水を授けた人」というのは復活後、潜伏時代の規制が崩れ、水方らの不在・支障の時、便宜上選ばれて授洗した人を指すのであろう。

水方として最も授洗数の多いのは鯛ノ浦のミカエル権六(一一五)で、その他御水帳記載の水方としては鯛浦のジワンたきぞ(一二三九)頭ヶ島のトマスまさ右衛門(一二三六)の兄弟、堀切のシモン吉五郎(二二〇)の四名がある。彼らが世襲であつたか否かは明らかではないが、権六は記載人物中、最も古い一八六四年九月に受洗しており、自ら受洗早々の同年中に三名に洗礼を授けて以来、この御水帳の記録された一八七七年に及び合計六九名。全人員の二四%

弱を一人で授洗しているわけである。たきぞは一八二〇年の受洗、そして七二一七六年間に六名。まさ右衛門は七二年の受洗、同年マリヤ(二五五)に授洗した時は「水を授けた人」であつたが、七三一七六年の間、水方として四名に授洗。吉五郎は七一年の受洗。そして七二・七五年に各一名授洗している。

この御水帳記載の本人ではないが(恐らく死亡のためであろう)本人縁者で水方として授洗している者にズリイナ(九四)の夫鯛ノ浦のアリシヨ七右衛門があり、一名に授洗している。その他薩尾のドミンゴスまつ次郎、奈麻内<sup>ナマナ</sup>のドミンゴスじんぞ、同ミギル庄吉、鯛ノ浦のつるぞ、江袋のトマスキ吉、中浦の喜作、舟隠のじんゑんもん、黒島のジワンだい吉、この首のまごぞ、真手浦の助蔵、平戸の善次郎の一二名の水方があり、まつ次郎が三名授洗した他は、一・二名の授洗にとどまる。

水を授けた人としては鯛ノ浦のマタレナ(五〇)の子、福見生れのドミゴス吉平が推定される。彼の居住地の記載はないが、マタレナも福見生れであり、彼の弟と推定されるリース与八(死)の子らとともに鯛ノ浦に居住しているから、吉平も福見から鯛ノ浦に移り住んでいたであろう。とすると鯛ノ浦のドミゴス吉平として八名に授洗している人物と同一人であるに違いない。彼の授洗者は一八六五―六九年の間に限られており、御水帳記録の一八七七年にはすでに死亡していたのであろう。リース与八も七〇年に二名に授洗している。

その他水を授けた人としては高島のバスチャンねの助、鯛ノ浦のドミゴス栄助、古里のガスパルてつの助、大浦のドミゴス熊蔵、曾根のベトロ善七、奈麻内のさるまつ、中知のくま吉、嵯峨島の与次郎、たけ村のさるぞ、舟隠のたみぞ、浦上のとら次郎、計一四名がある。

即ち本人の水方四名と合せて水方一六名。水を授けた人一四名、計三〇名が一八二名に授洗していることとなり、

(144) 授洗者不詳の一〇名も恐らく水方によるであろうから都合一九二名。「みどふ」受洗者一〇〇名(権六授洗の一名を除く)。記帳本人の六五・八%は彼らによる授洗になる。

註

(1) 浦川師「復活前篇」二五二頁。田北耕也氏前掲書の各所、特に六一頁以下。

(2) 田北氏前掲書一六五頁以下。

(3) 田北氏前掲書一七二頁。

## X 注目すべき人物

最後にこの御水帳に現われた人物のうち注目すべき者を取上げて説明を加えて置こう。

まず水方ドミンゴスまつ次郎がある。彼が前述の五島キリシタンの中心人物ドミンゴ森松次郎その人であるか否かは、なお考証の余地もあろうが、以下の如く新史料の見出されぬ限り同一人を見てよいであろう。即ち、まつ次郎の出身としては「かげのを」即ち長崎港外蔭尾島となつてゐるが、森与重氏の小伝によると両親は出津の浜出身で、鯛ノ浦に移住とある。彼の生地そのものは明記されていないが、恐らく同地で生れたらしく、蔭尾のことは全く出ていない。しかし松次郎の妻カタリナとは明治五年帰天、蔭尾島に葬つたとあり、まつ次郎の「かげのを」との関連を思わせる。かつ彼の御水帳記載三人の授洗者は一八六六―七七年の間であり、うち二人が頭ヶ島、一人が蛤生れの者となつており、森松次郎が蛤ついで頭ヶ島に居住、信徒の指導に當つていた頃と一致する。そして同じ時に同じ島にドミンゴまつ次郎という水方が二人存したとは考えられぬので、まつ次郎は即ち森松次郎と考える。

次に最も授洗者の多いミカエル権六は前記の如く出身は鯛ノ浦であるが、まつ次郎から頭ヶ島で受洗した一人。四人の子女をノ鯛浦で生み、第五子ジワンさんの助(一一九)のみが頭ヶ島で一八六七年に出生、それに先立ち一家を

挙げて同島に移住したことが推知される。とすれば同島に迫害が始つた一八六八年十一月、信者らが死を決して集つていた家という中田権六が彼に該当する。彼らが有川などで拷問を受けている間に瀕死の病人が出たので権六は「新式のパウチズモ」を授けたという。御水帳において権六の授洗者は一八六八年に三名、六九年には〇であるのも、こうした迫害・入牢などの事情によるものと解される。但し彼は六八年十二月曾根生れの子(一四二)に授洗しており、なお中田権六とは断ぜられぬものもあるようであるが、共に有川で所預けとなつてゐる間に生れた子で、親の居住地が出生地として記入されたものかとも思われる。

古里のガスバルてつの助というのは、明らかに一八六五年五月大浦天主堂で信仰を表明、全五島の潜伏切支丹の復活を告げたガスバル与作である。与作は後にカテキスタとなり、浦川師によると「後の下村鉄之助」と註せられてい(1)る。(2)

曾根のペトロ善七も明らかに同地に信仰が燃上り、信徒らが頭ヶ島の松次郎のもとに派して教理を研究せしめた善七その人で、従来霊名が知られていなかったが、これによつて明確になつたわけである。(3)

また奈麻内のさるまつは星野猿松に相違ない。浦上で受洗、郷里で入教をすすめたが迫害にあい仲知に走り、さらに黒島に逃げたという。(4)さらに江袋のトマスくま吉は壬申の調書に出てゐる初蔵の弟、明治五年二六才の人物であらう。

以上は水方らであるが、浦川師の著に俗名のみで出てゐる一般信者もこの御水帳によつて具体的に知ることが出来る。

(145) まず頭ヶ島の信者で中田権六らとともに捕えられた人々のうち、熊助というのはイナシヨくま助(二四五)鯛ノ浦か

ら頭ヶ島に移住した人。福江島奥浦の源蔵の子で、恐らく祖父母は寛政移住者であつたであろう。妻は出津出身のイナシヨさんの助の女ジワンナおたせ(二四六)で異母姉妹にミカエル市松(一一二)、イサベリナおすみがあり、おすみは権六の妻となつている。夫妻の間にカタリナおみよ(二四九)、トメカスおとき(二五〇)の二女があり、おたせは先夫くめ造との間のイサベリナおはる(二四七)、アリイシヨ又吉(二四八)の連子があつたことが知られる。この一家は明治二年の血判帳に署名改心しているが、それにはくま助は熊蔵とあり、たせ、又吉、はる以上四名が血判。みよ、ときは幼少だからであろう血判はない。なお浦川師の記す熊助の子萬吉は又吉と訂正さるべく、萬吉は後記する如くフランシスコくまぞの子である。また血判帳に出て来る末松はくま助の兄弟で、妻とめとともに御水帳記帳當時にはすでに死亡しており、その子バスチヤンとら五郎(二六五)のみが記載され、血判帳では虎吉となつている。兄に長蔵が記されているが御水帳にはなく、これまた死亡したのであらう。

浦川師が次に記す茂市はシモン茂市(二八八)。父・母方ともに出津出身で、父はイナシヨ作次郎、母はマリヤおふで。冷水に生れ、船を経て頭ヶ島に渡つた人。フランシスコくまぞ(二七九)の先妻の子、ジワンナおたや(二八九)を妻とし、ミカエル元助(二九〇)を生んだ頃、同島の迫害が激化し一家もろとも拷問を受け出奔した。ところが次子パウロめ太郎(二九一)は一八七〇年伊勢の伊賀生れと御水帳に記されている。このことは茂市一家が浦上に出奔、かえつて一八六九年の浦上信徒配流に捲込まれて伊賀に流され、配流地と野でうめ太郎を生んだことを物語る。

(授洗者は同年の浦上中野郷の寅次郎)。浦川師の昔に伊賀配流五九名、五島・外海・伊王島の人々で浦上に避難した者が含まれていたとあるが、彼らこそそれであつたのであり、伊賀配流中の牛兒四名のうちの一人がうめ太郎であつたのである。帰郷は他藩配流者より遅れて一八七三年七月のことであつたが、茂市一家は頭ヶ島に再び落着いたらしく、第三子ウスラおきく(二九二)は一八七四年に同島に生れている。この御水帳で配流関係はこの一家のみである

が、浦上、大明寺など他の御水帳が調査されれば、このような配流事情がより多く知られるであらう。

熊造は前出のフランシスコくまぞ。出津のドミゴス久八、カタリナおかちの子。同地の生れ。永田のマタレナおそよと結婚、ジワンまん吉(二八三)を黒島で生み、やがて鯛ノ浦に渡り、茂市の妻となつたジワンナおたやを生み、さらに一家を挙げて頭ヶ島に移住した。このジワンまん吉が浦川師が熊助の子とされた萬吉で、迫害の一八六七年までにウスラおきく(二八四)と結婚、鯛ノ浦に別戸を構えていたらしく、すでにトマス半五郎(二八五)を同地で生んでおり、迫害後再び頭ヶ島に帰り、続いて二子を挙げている。母のマタレナおそよはまた迫害前に死亡したらしく、熊蔵はカタリナおたも(二八〇)と再婚、すでに一女イサベリナおしを(二八一)を挙げているが、このおたも父ジワンかん助は出津のペトロ五郎の子。母マリヤおといはトマス市郎の子。そして萬吉の妻ウスラおきくは父ミカエルかん兵衛はかん助と兄弟、母のイサベリナおたみはマリヤおといと姉妹、即ち熊蔵父子の妻はそれぞれ従姉妹同志で、萬吉夫妻は義理の従々兄妹という複雑な関係をなしていることが知られる。

浦川師の記す弥雄造は御水帳記載の當時にはすでに死亡しているが、頭ヶ島のトマス作次郎(二七二)やマリヤおあきと兄弟で、大野のトマス丈八の子、ドミゴス八百蔵とある。出津のフランセスコ重蔵の娘マリヤおきせ(二三〇)と結婚、三子を挙げている。頭ヶ島の血判帳があるように彼ら一家も一旦改宗を誓つた人々で、和助、善兵衛、てる、きく、すみ、きせと列記され、御水帳のミカエルわすけ(二三二)、ジワン善べい(二三四)、イサベリナおてる(二四一)、トメカスおきく(二三二)、ズジナおすみ(二三三)及びマリヤおきせに相応する。

作次郎一家も同様血判帳に作次郎、ゆい、丈平、清蔵、太吉、中松、はつ、ゆき、きく、きなど列記されるように

妻トメカスおゆい(二七三)以下、ドミゴス文平(二二八)、ペトロせいぞ(二七四)、ドミゴスたちち(二二九)、ジワンさる衛門(二七六)、マリヤおきあ(二七五)、シワンナおきな(二七七)の六子に、恐らく明治十年までに他郷に嫁入したか死亡したはつ、ゆき、それに一八七一年に生れたドミゴス市まつ(二七八)の九子があつた。彼らはこうしてみな立寄り、一八七二年に作次郎は正式に受洗していることが証される。その他トマス政右衛門(二三六)なども同様である。

さらに浦川師の著に舟隠の中田卯平とサノ夫婦の受難が載せられているが、これはロレンソ卯之助(七〇)とカチリナおさの(七一)夫妻であるに相違ない。卯之助は舟隠の人で一八七七年現住地は鯛ノ浦となっており一致する。系譜的解説は省略する。また浦川師が特に曾根迫害の談話を採録されたドミニカ中田ミヨ女も御水帳のドナメおみを(三〇)として記載されている人であらう。迫害下に浦上に渡り受洗した五人の娘たちの一人で、時は一八六九年九月十三日とある。

その他血判帳に署名した人々を挙げると、倉蔵、はせは、前者は死じ、後者はマリヤおはせ(二五一)として記載され、それに続く増右衛門、たせ、初五郎、庄蔵、寄吉、あも、ふみ、せをは、この二人の婿、御水帳の記す、ますエ門(二六六)娘ドメカスおたせ(二六七)の夫婦とその子女、即ちペトロ初五郎(二五二)トマス庄吉(二六八)ジワンとめ吉(二七一)、マリヤおふみ(二六九)、カタリナおせを(二七〇)におたせの妹カタナおあも(二五三)である、せをに続いて血判帳にきくの名があるが、御水帳に該当する者なく、恐らくそれ迄に死亡した増右衛門の娘であらうと思われる。

勇吉、なる、きをの一家は恐らく御水帳のトメカスおなる(二六四)で、夫と娘とはそれまでに死亡したものであ

らう。

次に「切支丹宗鯛之浦居着改帳」記載の七世帯も、一世帯を除き、この御水帳に記載されている。名及び年令の相違が若干認められるが、御水帳の記載を採るべきであらう。まずきや、娘しよの二名は、前にも掲げた水方アリシヨ七右衛門の妻マタレナおよせ(八〇)の妹、ズリイナおきや(九四)と娘のカタリナおしを(九五)。娘は改帳では四ツとあるが、七年後で二才の開きがある。七右衛門は従つて明治三年までに死亡し、おきやは、やがてペトロせいぞ(九〇)と連子して再婚、一八七七年四才を頭に二子を挙げるのであるが、この改帳では前記の如く勢蔵には女房ときが記されており、ときの死亡、きやの再婚が子の年令から一八七一年ごろであつたことが知られる。

次の久米蔵一家はアリシヨくめぞ(八九)で年令に四年の差があるが、女房そいはイサベリナおそいに当る。御水帳では本人として扱われていず、七七年までに死亡したものであらう。悴勢蔵はペトロせいぞで当時の女房はときであつたことは前記の如くである。次に勢蔵の悴として当時十才の重吉が記されているが、これは御水帳では勢蔵の弟トマス重吉(九二)に当る。何れかの誤りであらう。さらに久米蔵の悴又蔵とあるのはミカエル又吉(九一)であらう。また母きぬが記される。これはジワンナおきをに該当する。

次の藤五郎一家三名は御水帳に当る者が見当たらない。

次の増右衛門一家はトミンコスますあもん(三三)で、女房さやはイサベリナおきよ(三四)娘さなはドメナおきな(三五)同つるはマリヤおつる(三六)に当り、改帳記録ののちさらに二女を挙げている。

次の久三郎一家はトマス久左衛門(七六)に当る。改帳に女房みのとあるのは、事実久左衛門の妹イサベリナおみの(八一)で、弟多市はイナシヨ太市(八二)母よしはマタレナおよせ(八〇)である。御水帳になお妹カタリナお

たみ(八三)があるが、当時十二才の彼女が改帳から脱走している事情は不詳である。久左衛門は改帳記録の後曾根のイサベリナおとめ(七七)と結婚、一男一女を挙げている。

次の金兵衛一家はマルゴスきんべい(四〇)で、女房きくはドメナおきく(四一)・忒市蔵はトマスい三郎(四三)・同半次郎はパウロはんきち(四五)に当り、娘たけはイサベリナおたけ(四六)である。この他金兵衛夫婦には一八七〇年には生れてはいたはずのドミンゴスそ五郎(四七)・テカラおあを(四八)があるが、改帳には記されていない。その後金兵衛にはトマスききぞ(四九)なる子が生れ、また長男トマスい三郎も江袋のマタレナおせつ(四三)と結婚、一子を挙げている。

最後の才蔵夫妻は三婚の例として前掲したトマス才蔵(一〇三)である。

註 (1) Marnas, op. cit. II. p. 166 n. (2).

(2) 浦川師「復活後篇」一九二頁。

(3) 同 二三五―二三六頁。

(4) 同 二三三頁。

(5) 同 二〇四頁。

(6) 同 六五九頁。

(7) 同 二〇八頁。

(8) 同 二四八―二五〇頁。なお「千串調書」曾根郷に市平の妻みよ(申廿六才)なるものがあり、年令的には一致するが、すでに当時乙吉という八才の子があり、同人と認める。